

2017年度年間テーマ — 「いい人生だったね」と言えるように—

会発足、十九年
見守る
微笑む
感謝する
励む
励ます
人のために
喜ぶ
愛を込めて
聴く
活動できなくな
った方々が
してくださる
おもてなし
橋詰



総会

3月11日（土）10:00～12:30 会場：福祉会館 303号室
参加者 29人

3月11日に犠牲者となられた方、会員の中にも亡くなられた方や大切な人を亡くされた方もおられます。まず黙とうから始まりました。

副代長柴田睦さんの進行により「2016年間テーマ『いい人生だったね』と言えるように」での活動報告 会計報告 監査報告を行い、2017年度の活動計画案 会計予算案 運営委員の紹介をし、その全てをご承認いただきました。ありがとうございました。

議事の中で、運営委員から、手縫い、つどい、緩和ケア病棟のボランティアの参加者募集 新運営委員の呼びかけがありました。お気持ちがある方は、どうかご協力ください。



その後、皆さんお待ちかねの交流会を開きました。

岡崎に緩和ケア病棟ができて12年。初めて緩和ケア部長としてお迎えできた渡辺正先生が退職されたので、今回は送別会と称してお呼びしました。



渡辺先生から頂いた美味しいお菓子を味わいながら先生の近況報告を伺いました。現在、先生は、特別養護老人ホームにも勤務され、名古屋でホームレスのボランティアもされています。生活保護で一人暮らしの方のお宅を訪問したり、名城公園にテントの中で暮らしている方たちの医療相談をして関



わる中で、そこに住む人が傷を負ったカラスを助けたり、猫に餌をやったりと心優しい人が多いことに気づかれたそうです。「ホスピスの原点に戻ってみたいと思った。」とホームレスの中でボランティアをされる目的を話されました。

目と手を使って五感で診る特別養護老人ホームでの診療は医者としての力がしっかりと試されると思うとのことでした。新しい挑戦をし続けておられる先生の輝くお顔に勇気をいただきました。



緩和ケア病棟では、患者さんに日の出を感じていただけるようにと願いながら病室のドアを開ける。医者は、病気だけを診るのではなく、がんという病気にかかったために社会と生活をどのように患者さんが、感じておられるかを観て「感情の手当」をして差し上げることを心がけていると話されました。

ディケアで患者さんに声をかける時、例えば「癌がわかった時、どんなふうに感じましたか。」「ご自宅では、どんなふうですか。」と尋ね、最初から深く踏み込まないで、患者さんからの話から繋げて寄り添うことを心掛けておられた。

イギリス研修中、ディケアに患者さんが亡くなる寸前まで来られ、帰ってすぐ自宅で亡くなられた話をボランティアに聞き「ディケアが患者さんにとってそれほど楽しく大切な場であったのでしょね」と。日本の緩和ディケアでも、日常生活を離れ患者さんが元気になって自宅に帰られる場になってきている。医者が患者さんと話をして医療の話しかできないが、ディケアだと日常生活を話すことができるので、「病の物語」から「人としての物語」に発展できる場所になるとのことです。



「先生はどんな死に方をしたいですか。」という質問に先生は「特養で診ていると、点滴とか一切なくて浮腫もなく静かにおだやかに亡くなっていく。」「それもひとつの選択だと考えている。」と答えられました。そして「ちょっと過激な発言になってしまいましたね。」と苦笑されました。



会の途中、運営委員手作りの“豪華？豚汁フルコース？”を頂きながら30人ほどが近況報告、19年間の思い出、先生への質問などで話が盛り上がりました。

最後に、先生へ会からの感謝の気持ちを込めたプレゼントを差し上げました。デニムのおしゃれなエプロンです。これからは時には台所に立って覚えないと・・・と同じ世代の私たちが主人に思う要望でもあります。



先生の存在はまるで砂漠の中のオアシスのようです。いつまでも謙虚で穏やかな話し方をされる先生のお姿を拝見しながら、また会いたい、また聴きたい、何度でも・・・と思うのはなぜでしょう。先生自身がホスピスそのものだからではないのでしょうか。「先生を是非また呼んでください」と要望された会員の希望がかなえられる2017年でありますように。
〔永谷美雪〕

◆ご寄付ありがとうございました。

- ・安藤美保子さま（緩和ケア病棟でアイスを「おいしい」と喜ばれたお父様の姿に、お母様はいつも感謝していたとのお言葉を添えて・・・）もう何年も前のことですが。
- ・藤井祐子さま（手編みのスリッパ売り上げ金を）・匿名希望の方（ある目標を達成されたからと）